

モノ学の冒険 第1部 P87-P98

心とモノの魂について(河合俊雄)

2010/4/17常盤塾

今田純

<記述内容の要約>

魂は人の心の中にあるのではなく、そこらじゅうにあまねく存在しており、時おり物体や事象に憑依(憑き物)して人の心に働きかける。憑かれたものがモノである。中心は人間の側ではなく、モノの側にある。向こうが先にある。これは古代人の考え方で、いわゆる近代的な発想とは真逆であるが、日本人の心にはフィットしやすいように思われる。しかし近年、モノと魂の関係が混乱した病的な人や事象を見かけるようになった。それに対する答はまだ出ていない。

- 【ポイント】
- ①魂は人の外にある
 - ②ものは魂を帯びてモノとなる

? 気になったところ?

デカルト自身は非常に狂った面白い人だった

心理療法は圧倒的にデカルト的な考え方に基づいている

科学も、
だよな……

この時計は存在しないかもしれない、この鉛筆は存在しないかもしれない、このパソコンは存在しないかもしれない、と考え、疑い続けていく。

確かに正気じゃない

何でこんな**カガク**が生まれたんだらう？

方法序説(1637)

その前1世紀のヨーロッパ

宗教的大混乱

ルター 95箇条の論題	1517
プロテスタント登場	1529
イギリス国教会登場	1534
プロテスタント公認	1555
イギリス国教会公認	1547
ツヴィングリ、カルヴィン:長老派、ピューリタン	
オランダ独立戦争	1561-1581
ユグノー戦争	1562-1598
サン・バルテルミーの虐殺	1572
アルマダの海戦	1588
ドイツ30年戦争	1618-1648
魔女狩り全盛 16-17世紀	
新大陸の金銀による価格革命 16世紀	

信じられるものが何もない

すべからく一切を疑うべし

我思う、ゆえに我あり

今ここで頭をひねっている自分の存在だけは、さすがに否定できない
それだけが、信じられる唯一の対象

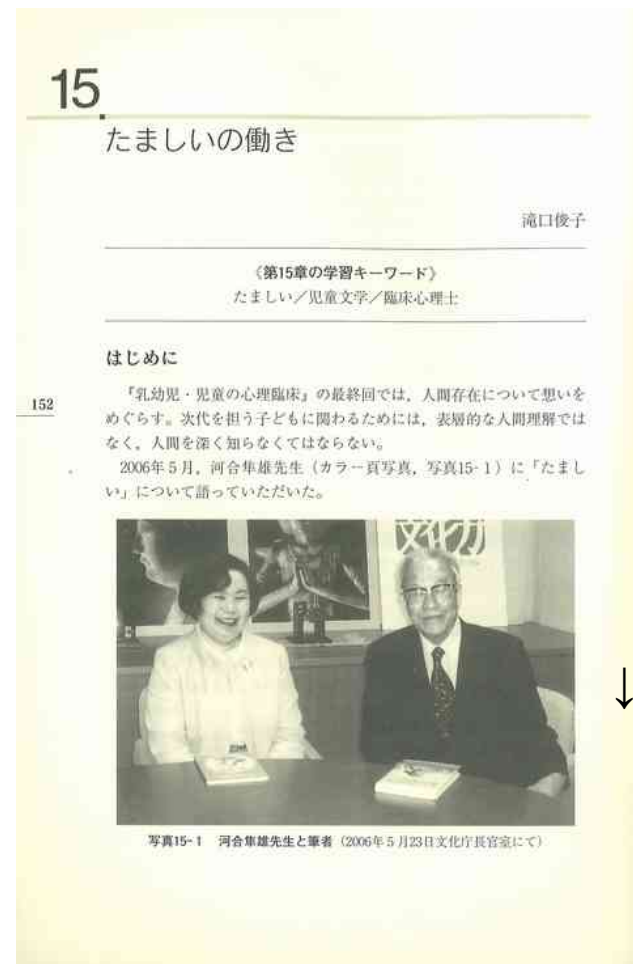
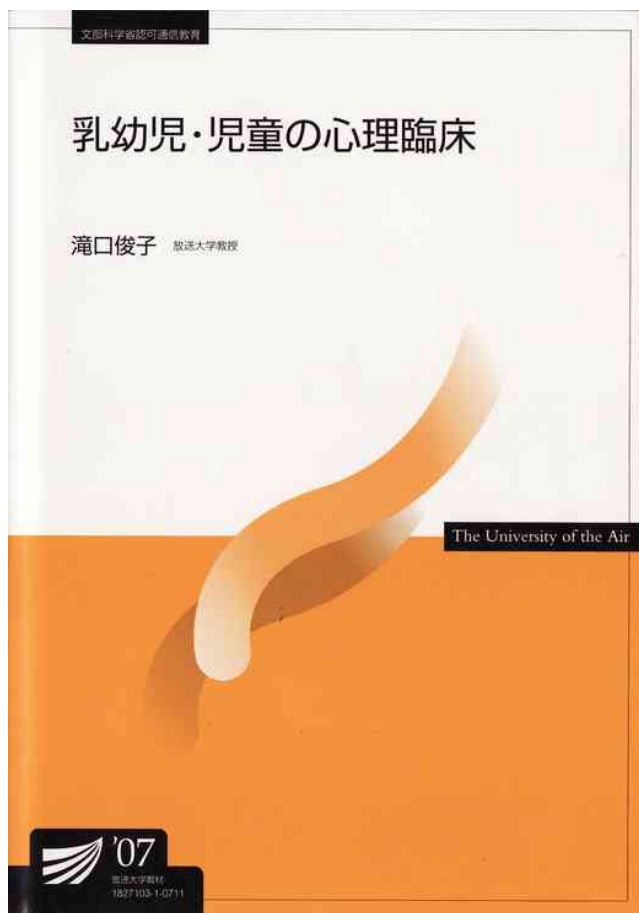
こう思っちゃうのも、無理はなかろう

でも、こんなの

ぜんぜん幸せじゃない！

うれしくもなんともない！

もっと**普遍的**な何かを、**手放し**で信じたいじゃん



信じられる絶対的な存在としての「たましい」

乳幼児・児童の心に必要だそうです

モノ学≡ユング心理学

における魂とは、

何でも魂であるということ

一人ひとりの頭の中ではない
社会に共通な存在として魂がある
それが時々に従って、それぞれの発現をするだけ

この、「そこらじゅうにある気」

ユングいわく

元型

なんか、
似たような思想、
聞いたことない？

構造主義

あらゆる文明や社会に共通する枠組みがある

レヴィ・ストロース



ANTITHESIS



サルトル

人間が自由に主体性を持って思考し、歴史を作っていく。それが文明

実存主義



モノのたましいが強いべし！派

ユング

ほんま
でっか？

一人ひとりの無意識ばかりじゃなく、全員に
共通する「みんなの無意識」がある

それが

たましい



ANTITHESIS



「心は科学的に分析できる」
「人の心は千差万別」

フロイト

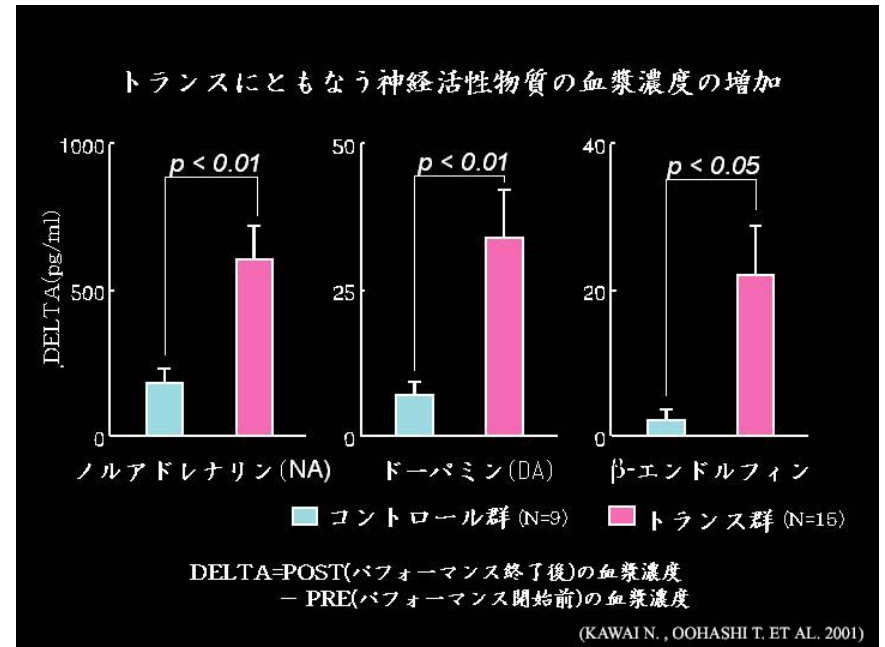
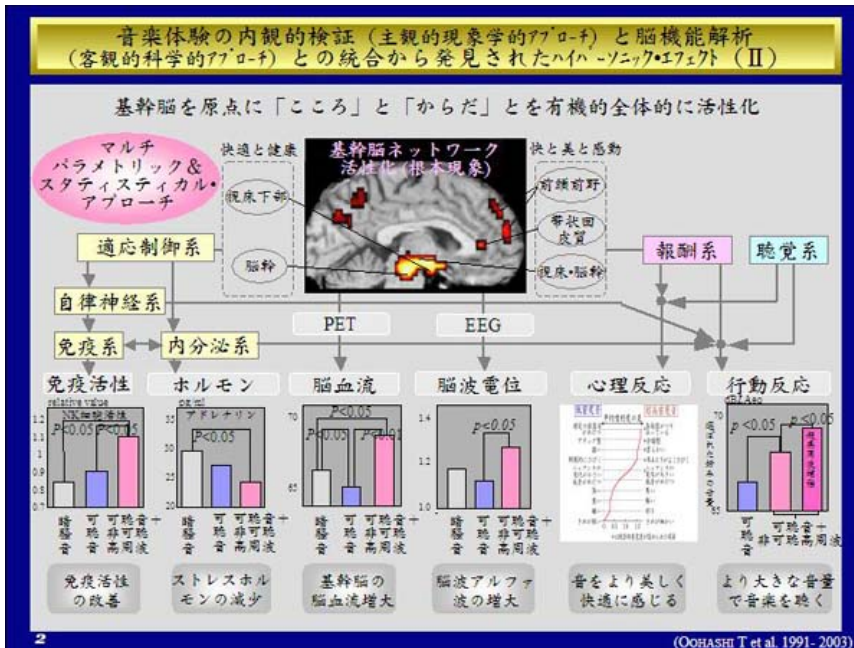
意識・前意識・無意識

人のこころが強いべし！派

まずはデカルトの大地で相手をねじ伏せられなきゃ、意味ないんだよ。相手を倒した上で新しいことを始めなきゃ

大橋力

@Bali, March 2008



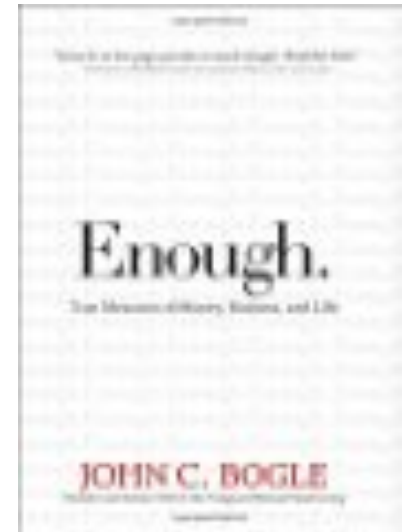
モノの変質

80年代、90年代～

途方もない要求をしてくる

話しばなしでとどまることを知らない

買ってくれというので、それを買っても満足しない。
モノの要求がとどまることを知らない。



「足る」を知らぬ

足るの知り方を知らない → なぜだろう？

なぜ足るを知らない？

便利なものが
考えなくてもいいものが
工夫しなくてもよいものが

いくらでも手に入っちゃうから

Digital + Money

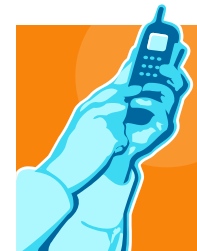
かつて道具とは

- ①値が高かった
- ②使いこなさないと使えなかった



今、ギアとは

- ①下手すりゃ無料
- ②誰でも使える



あり余っているものには、モノは憑けない

60年代、70年代ぐらいまでの製品には

「時代を超えた名機」があった



使いこなすのはけっこう難しかった
なんたって、大事に使ってた

「モノ」であった

用の美

便利で過剰な時代を迎えて

今田なりの解釈

魂と機能はトレードオフするのではないか
多機能になるほど、モノから魂が抜けていく

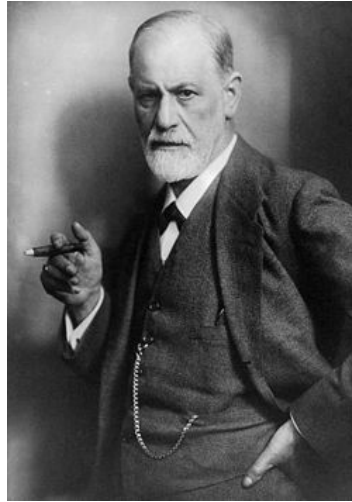
その一方で

使いこなす工夫をせず
いくらでも取替えがきくようになると

使う人間の側が劣化を始めるのではないか



近代を作った方々



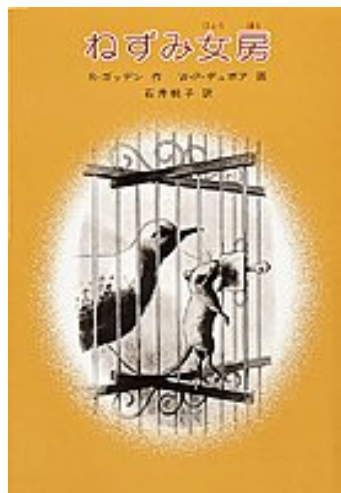
そろそろ決別しないと

マジ、やばい

でも慣れ親しんだ方法と決別するのは

痛み苦しみを伴う

それでも、
やらなければ



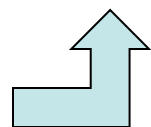
「あれが飛ぶということだ。窓の外に広い世界があるのだ」と、女房ねずみは知る。この女房ねずみにも孫ができ、ひ孫もいっぱいできた。子どもも孫も、何となく「あのおばあちゃんは自分たちの知らない世界を知っている」と思っていた。

福音館1977:原作1951

心の扉を開く



河合隼雄



中で「ねずみ女房」を引用し、

本当に大事なことがわかるときは、絶対に大事なものを失わないと獲得できないのではないか……。

何かを得るためには何かを失わなくてはならない……。

河合隼雄 2006「心の扉を開く」岩波書店